

町民文芸



只見短歌会

六月詠草

大塚栄一

指導

体調のみだれいささか気にしつつはや芽の出でしかと畑をめぐりぬ

馬場 八智

関谷登美子

詠みたきと思ふ事など数あれど家事雑用に今日も暮れゆく

目黒 富子

草とれば支えになりていたらしき倒れそうなる花に土寄す

新国由紀子

年の瀬に求めし白のシクラメン梅雨の窓辺に咲き揃ひをり

渡部ゆき子

畑はたに出て卒寿も近くば耳遠く互いに友らと手招き憩ふ

飯島小百合

帰宅後にポストをみれば葉書あり懐かしき字について類緩む

渡部ヨリ子

忘れな草の咲き乱れある飼猫の墓辺にしばし足を留めぬ

新国 洋子

誕生日に同居の姪が買ひくれし鉢植ゑのつつじ紫の濃し

(出詠順)

只見俳句会

七月例会

目黒十一

指導

夏帯や妣おば思んで濃い茶のむ
芍薬の一重と八重をもらい受け

味代子

瑠璃トカゲ目映い疾さ藪に消え
黄の嘴並べ思案の燕の子

幸生

柳絮とぶ幾星霜や塩の道
春風や茶屋の鶏舎に聞の声

礼

トンボとり子らの歓声今はなし
夏山や花に癒され縦走路

信

冷やされし茶碗蒸し受く人心
芯強し美しき人糸とんぼ

一穂

夏の夜や学童音読高々と
寝つかれぬ夜の長さや青葉木菟

都

雷鳴の一撃受けし村縮む
不揃いのとうもろこしや土寄せる

修一

行合の空に影引く鬼やんま
いびりをも懐かしみつつ墓洗う

吉児

